

2011年度NSF助成受給研究の約1.5%に盗作の疑い(3月8日)

米国科学財団(National Science Foundation: NSF)の監察総監室(Office of Inspector General: OIG)管理調査部(Administrative Investigation Division)のジェームス・クロール部長(James Kroll)は、2011年度のNSF助成受給研究約8,000件を調査したところ、その1%から1.5%に盗作の疑いがあるという結果が出たことを明らかにした。

盗作は、捏造、改ざんと併せて、連邦研究機関が研究不正行為と見なすもので、NSF監察総監(Inspector General: IG)のアリソン・ラーナー氏(Allison Lerner)によると、NSFに助成申請した研究の中で不正行為の疑いのある件数は、過去10年間で3倍以上に増加しており、2003年以降に発覚した120件の研究不正行為のうち80%以上が盗作であると確認されたという。

2月28日に連邦下院科学宇宙技術委員会(House Committee on Science, Space, and Technology)が開催した公聴会に証人として出席したラーナー氏は、NSFが受理する年間約4万5,000件の助成申請研究のうち、1,300件の研究に盗作が関与し、450件から900件の研究に捏造・改ざんなどの問題のあるデータが含まれている可能性があると言明したが、同じく証人として出席したクロール氏は、その全てに対応することは現実的には困難であるとしている。

Science Insider, NSF Audit of Successful Proposals Finds Numerous Cases of Alleged Plagiarism

<http://news.sciencemag.org/scienceinsider/2013/03/nsf-audit-of-successful-proposal.html>